

探求するコミュニティのデザインに向けて
 ー外国にルーツを持つ子どもへの教育実践事例からー
 UNDERSTANDING COMMUNITY OF INQUIRY THROUGH THE SUPPORT
 PROVIDED TO A LANGUAGE-MINORITY CHILD'S LEARNING

半原芳子, 福井大学
 Yoshiko Hanbara, University of Fukui

1. はじめに

近年、グローバル化による産業構造の変化や活発な人口移動により、外国にルーツを持つ子ども達の状況が多様化・複雑化している。筆者は長年外国の子ども達の支援にかかわっているが、現場では、日本生まれ・日本育ちの子ども、三言語・四言語環境の子ども、またグローバル化と直接的な関係はないが特別支援が必要な子ども達とも多く出会うようになった。そうした状況下では、もはやある一つのアプローチや専門分野だけで子ども達の学習や成長を支えていくことは困難であり、今後は分野を横断し様々な取り組みをしている者達が協力・連携しながら実践の知を培い合う「探求するコミュニティ」を展望していくことが、子ども達のためにも、また学習支援者にとっても重要なことだと考える。

本稿では、そうした問題意識に基づき、筆者が現在福井大学にて学生と取り組んでいる外国にルーツを持つ子ども達への教育実践を報告する。現在学生によっていくつかの活動が行われているが、ここではその中で2年半と一番長く継続して取り組まれている中国出身 M ちゃんへの支援を見ていく。そこから学習支援者の探求するコミュニティのデザインに向けた具体的な示唆を得たい。

2. 中国出身 M ちゃんへの支援の展開（2014年3月～2016年8月現在）

「教科・母語・日本語相互育成学習」の開始

M ちゃんは福井市内の公立小学校に通う女の子で、2013年、小学1年生の時に来日した。両親との三人家族で、母親は中華料理店でコックをし、父親は中国では教師をしていたが日本では家事を担っている。両親は日本語を話さない。

M ちゃんが小学2年生に進級する直前の2014年3月、当時外国人子女教育に興味を持っていた福井大学教育学研究科の院生3名（日本人学生1名、中国人留学生2名）により M ちゃんの支援が立ち上げられた。M ちゃんは中国人留学生の知り合いであった。M ちゃんは低学年で来日しているため、将来母語の力が弱くなるもしくはダブルリミテッド（二言語不十分）に陥ることが危惧された。そのため母語と日本語で教科学習を行う「教科・母語・日本語相互育成学習」

（岡崎 1999）による支援を行うこととした。週に一回 90分、大学において M ちゃんの母語である中国語と第二言語である日本語で国語の先行学習を始めた。

「教科・母語・日本語相互育成学習」による支援によって、M ちゃんの母語と日本語の力を伸ばす状況が整い支援が充実しつつある2014年5月、学生がある一つの事実に気づいた。それは M ちゃんが放課後一人で遊んでいることであった。心配した中国人留学生が M ちゃんの両親に尋ねたところ、M ちゃんが放課後日本人の友達の家遊びに行った際、迷惑をかけても自分達は日本語で謝り

に行けないから自宅にいるよう命じているということだった。友達との関係や地域とのつながりといった社会的な関係が弱いことを案じた学生達は、福井大学の「探求ネットワーク」にMちゃんをつないでいった。

福井大学「探求ネットワーク」との連携

「探求ネットワーク」は福井大学教育地域科学部（当時）の学生が、地域の子ども達と共に長期に渡る協働探究活動を行っているものである。教職課程を履修する学生にとって、1年生は選択必修科目に、2・3年生は選択科目として位置づけられている。そこには小学4年生から高校3年生まで、様々な学年・学校の子ども達が約300人参加している。「かみすきブロック」や「もぐもぐブロック」、「それいけ探検隊ブロック」など9つのブロックに分かれており、春・夏・秋・冬のサイクルを持って一年に渡り活動を行っている。活動の頻度は一ヶ月に2回ほどで、夏にキャンプ合宿や、春と冬に学習の成果を発表するおまつりがある。この探求ネットワークは1995年から20年以上に渡り継続して行われている。Mちゃんの支援をしている学生は、この学内の探求ネットワークだったらMちゃんの両親も安心してMちゃんを外に出すことができるだろうと考え両親に薦めた。結果、承諾を得て、Mちゃんは探求ネットワークに入ることとなった。

Mちゃんは福井の伝統工芸である紙すきを活動のメインに据える「かみすきブロック」に入った。当時かみすきブロックには小学4年生から高校2年生までの子ども達が所属していた。小学2年生だったMちゃんはそこで自分より学年が上のお兄さんやお姉さん、そして大学生達と共に活動を行うこととなる。以下はある日の探求ネットワークでのやりとりである。Mちゃんはこの日のグループ課題である「すごく光る紙」の材料選びをしている。他の子ども達や大学生（スタッフ）との協働の中で、意思決定をしたりマジョリティーである日本人の子ども達に提案を行ったりしている様子が窺える。

M：絶対破れないあの牛乳パックとか使っていい？もっと私らしか使わない最新手段

T：（ビニールテープを触りながら）ほらぐちゃぐちゃ

スタッフ：使えそう

M：使えそうねー

[班のみんながいるところに戻って]

M：青とオレンジのテープ、これとこれ、どっちがいい？

スタッフ：どっちもいいね

M：じゃ、みんな集まって

[みんなが顔を寄せる]

M：どれがいい？決めて。（オレンジのテープを持って）じゃあこれがいい人？

[何人か手を挙げる]

M：何人ある？（青のテープを持って）じゃあこれがいい人？

[一人手を挙げる]

M：オレンジがいい人、青がいい人

スタッフ：オレンジでやってみよっか。待って、（このオレンジのテープで）何するんだっけ？

（2014年5月24日 筆者の観察ノートより抜粋）

また、探求ネットワークではMちゃんのルーツが大事にされた。第二外国語の授業で中国語を選択している学生がMちゃんに中国語を習ったり、Mちゃんのお父さんが迎えに来た時は、ブロックのリーダーの学生や高校生がお父さんの所に駆け寄り談笑したりする姿も度々見受けられた。

「教科・母語・日本語相互育成学習」と探求ネットワークの連携の中で生まれた学習のデザイン

Mちゃんが探求ネットワークに入ったことで「教科・母語・日本語相互育成学習」の学生と探求ネットワークの学生の連携が始まった。何かを一緒に行うことはなかったが、両者は緩やかにつながっていた。「教科・母語・日本語相互育成学習」では、Mちゃんの普段の学校のリズムに加え、探求ネットワークのリズムを意識した学習のデザインが行われた。具体的には、夏休みや冬休みといった長期休暇の時には絵本の朗読や日本語のかるた作り等が行われ、探求ネットワークのキャンプ合宿が終わった次の回の支援では母語中心の支援が進められた。Mちゃんは普段学校では日本語の環境であっても、家に帰れば母語が使える。しかし、探求ネットワークの合宿ではすべて日本語のみの環境になる。そのため母語の時間を回復するねらいを持って、合宿後は母語中心の時間を導入していた。

Mちゃんのコミュニティの拡大ー「探求ネットワーク」から次のコミュニティへ

Mちゃんは探求ネットワークを小学2年生から3年生までの2年間続けた。小学4年生になった今は探求ネットワークを卒業した。理由は、地域のバドミントンクラブに入ったためである。Mちゃんの強い希望で入団したそうだ。今は、福井市の隣の春江市にあるクラブまで週に5日お父さんと自転車で通い、異学年の子ども達とバドミントンに励んでいる。小学2年生の時、放課後一人で遊んでいたMちゃんの姿も、またMちゃんを自宅にいるよう命じていたお父さんの姿も今はもうどこにもない。

3. Mちゃんの支援にかかわった学生の学び

Mちゃんへの支援では、Mちゃんだけでなく学生も学び成長していた。以下は学部4年生Tさんのふり返り（一部）である。TさんはMちゃんが小学3年生（2015年度）の時「教科・母語・日本語相互育成学習」を担当してくれた女子学生である。当時教員になることを志しており、現在は福井県内の学校で教員をしている。

自分自身の成長っていうものをふり返ってみると、その、やっぱり教員になるっていうことで、どんな子どもがいるかっていうのを知らずに教員になると、一年間を通して、例えば生徒の2割とかが外国人とかハーフの学校もあるとか、そういう子どもに対してこういう支援ができるとか、そういうのを助けてくれる存在があるっていうのを知らずに、教員に、あ、知って教員になるっていうのはやっぱ全然違うなって思っていて。その、全然他人事ではないし、自分ができるところを考えられたので、そこは成長かなって思いました。（中略）で、支援をしてやっぱ一番大切だなって

思ったのがチームプレーって言いますか、そのMちゃんとのつながりも大切だけど私とOさん（中国人留学生）の関係っていうのも支援をしていく上ではすごい大切だったんだなっていうのがあって、自分で言うところちょっと恥ずかしいんですけど、なんかOさんと合ってたなっていうのがありまして、お互いに全然違うから全然違う影響をMちゃんにしてあげられたんだなって思って。で、教員になった時にこのペアが誰になるのかなって思ったら、例えば子どもの保護者さんだったりするのかって思うとOさんみたいにやることはできないかもしれないから、だけどそこで諦めずにたくさん話していく、で、通じ合って一緒に子どものことを考えてあげられたらいいなって思いました。

Tさんのふり返りから、TさんがMちゃんへの支援を通じ学校の教員としての構えを培っていること、そして協働の大切さへの認識を深めていることが分かる。

4. 探求するコミュニティのデザインに向けて

冒頭の問いに立ち返り「探求するコミュニティ」のデザイン、筆者自身の実践に引き付けた場合、外国にルーツを持つ子ども達への支援を行っている主に福井大学の学生の探求するコミュニティを今後どうデザインしていくかについて、上記で得られた知見をもとに考えたい。

Mちゃんの支援が大きく展開していたこと、また学生も学んでいたことから、今後は学習の場、具体的には学生が自分達の言葉で自分達の実践の展開を辿る機会をつくり出したい。学生は実践の中でたくさんの判断と挑戦と失敗をし、そして再チャレンジをしている。その積み重ねの上での2年半であり展開である。今回実践の展開を追ったのは筆者であるが、そうした実践のプロセスや起伏を今後は実践者である学生自らが掴み展望を切り拓いていけるようにしたい。また、そうした学生の実践の知は固有のものではあるが、多くの実践者と共有できる智慧でもある。したがって、多様な他者と長いスパンで省察と探究を積み重ねていけるような仕掛けをつくりたい。現在、福井大学にはMちゃんの支援の他に、日本人学生と留学生が小・中学校や公民館で外国の子ども達への支援を展開している。そうした個々の取り組みをつなぎながら、全体で協働省察・協働探究していけるような「探求するコミュニティ」のデザインに今後取り組んでいきたい。

参考文献

- 岡崎敏雄（1997）「日本語・母語相互育成学習のねらい」『平成8年度外国人児童生徒指導資料母国語による学習のための教材』茨城県教育庁指導課, 1-7.
- 福井大学教育地域科学部探求ネットワーク（2014）（2015）『協働探求者を育むプロセス—子どもたちと長期にわたる活動から見えてくる探求の学び』
- Donald A. Schön. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action: Basic Books.* (柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的实践とは何か』鳳書房, 2007)
- Etienne Wenger, & Richard McDermott, & William M. Snyder. (2002). *Cultivating Communities of Practice: A Guide to Managing Knowledge: Harvard Business School Press.* (野村恭彦監修『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社, 2002)